雪の日

樋口一葉

見渡すかぎり地は銀沙を敷きて、舞ふや蝴蝶（こてふ）の羽（は）そで軽く、枯木も春の六花（りくくわ）の眺めを、世にある人は歌にも詠み詩にも作り、月花に並べて称（たた）ゆらん浦山（うらやま）しさよ、あはれ忘れがたき昔しを思へば、降りに降る雪くちをしく悲しく、悔（くい）の八千度（やちたび）その甲斐もなけれど、勿躰（もつたい）なや父祖累代墳墓（みはか）の地を捨てゝ、養育の恩ふかき伯母君にも背（そむ）き、我が名の珠に恥かしき今日（けふ）、親は瑕（きず）なかれとこそ名づけ給ひけめ、瓦に劣る世を経（へ）よとは思（おぼ）しも置かじを、そもや谷川の水おちて流がれて、清からぬ身に成り終りし、其（その）あやまちは幼気（おさなぎ）の、迷ひは我れか、媒（なかだち）は過ぎし雪の

日ぞかし。
　我が故郷は某の山里、草ぶかき小村なり、我が薄井(うすゐ)の家は土地に聞えし名家にて、身は其(その)一つぶもの成りしも、不幸は父母はやく亡(う)せて、他家(ほか)に嫁ぎし伯母の是れも良人(をつと)を失なひたるが、立帰りて我をば生(おほ)したて給ひにき、さりながら三歳といふより手しほに懸け給へば、我れを見ること真実(まこと)の子の如く、蝶花の愛親(おや)といふ共(とも)これには過ぎまじく、七歳よりぞ手習ひ学問の師を撰(え)らみて、糸竹(いとたけ)の芸は御身づから心を尽くし給ひき。扨(さて)もたつ年に関守なく、腰揚(あげ)とれて細眉つくり、幅びろの帯うれしと締(し)めしも、今にし

て思へば其頃の愚かさ、都乙女の利発には比（く）らぶべくも非らず、姿ばかりは年齢ほどに延びたれど、男女の差別なきばかり幼なくて、何ごとの憂きもなく思慮もなく明し暮らす十五の冬、我れさへ知らぬ心の色を何方（いづこ）の誰れか見とめけん、吹く風つたへて伯母君の耳にも入りしは、これや生れて初めての、仇名（あだな）ぐさ恋すてふ風説なりけり。

世は誤（あやまり）の世なるかも、無き名とり川波かけ衣、ぬれにし袖の相手といふは、桂木一郎とて我が通学せし学校の師なり、東京の人なりとて容貌（みめ）うるはしく、心やさしければ生徒なつきて、桂木先生と誰れも褒めし

が、下宿は十町ばかり我が家の北に、法正寺と呼ぶ寺の離室（はなれ）を仮（かり）ずみなりけり、幼なきより教へを受くれば、習慣（ならはし）うせがたく我を愛し給ふこと人に越えて、折ふしは我が家をも訪ひ又下宿にも伴なひて、おもしろき物がたりの中に様々教へを含くめつ、さながら妹の如くもてなし給へば、同胞（はらから）なき身の我れも嬉しく、学校にての肩身も広かりしが、今はた思へば実（げ）に人目には怪しかりけん、よしや二人が心は行水（ゆくみづ）の色なくとも、結（ゆ）ふや嶋田髷これも小児（こども）ならぬに、師は三十に三つあまり、七歳にしてと書物の上には学びたるを、忘れ忘られて睦みけん愚かさ。

見る目は人の咎(とが)にして、有るまじき事と思ひながらも、立ちし浮名の消ゆる時なくば、可惜(あたら)白玉の瑕(きず)に成りて、其身一生の不幸のみか、あれ見よ伯母そだてにて投げやりなれば、薄井の娘が不品行(ふしだら)さ、両親あれば彼(あ)の様(やう)にも成らじ物と、云ひたきは人の口ぞかし、思ふも涙は其方(そち)が母、臨終(いまは)の枕に我れを拝がみて。姉様お願(ねがひ)は珠が事をと。幽(かす)かに言ひし一言あはれ千万無量の思ひを籠めて、まこと闇路に迷ひぬべき事なるを、引受けし我れ其甲斐(そのかひ)もなく、世の嗤笑(ものわらひ)に為しも終らば、第一は亡き妹に対し我が薄井の家名に対し、伯母が身は抑(そもそ)も何とすべき。と御声ひくゝ四壁(あたり)を

憚りて、口数すくなき伯母君が思(おぼ)し合(あ)はすること
ありてか、しみじみと諭(さと)し給ひき、我れ初めは一向(ひたすら)
夢の様に迷ひて何ごとゝも思ひ分かざりしが、漸々(やうやう)
伯母君の詞するどく。よく聞けよお珠、桂木様は其方
を愛で給ふならん、其方も又慕はしかるべし、されど
も此処に法(きまり)ありて、我が薄井の家には昔しより他郷
の人と縁を組まず、況(まし)てや如何に学問は長じ給ふと
も、桂木様は何者の子何者の種とも知らぬを、門閥家(いゑがら)
なる我が薄井の聟とも言ひがたく嫁にも遣(や)りがたし、
よし恋にても然(し)かぞかし、無き名なりせば猶(なほ)さらの
こと、今よりは構へて往来(ゆきき)もし給ふな、稽古もいらぬ

事なり、其方大切なればこそお師匠様と追従(ついしょう)もしたれ、益(えき)も無き他人を珍重には非らず、年来(としごろ)美事に育だて上げて、人にも褒められ我れも誇りし物を、口惜しき濡(ぬ)れ衣(ぎぬ)きせられしは彼(か)の人ゆゑなり、今までは今までとして、以来(これより)は断然(ふっつり)と行ひを改ため、其方が名をも雪(そそ)ぎ我が心をも安めくれよ、兎角(とかく)に其方が仇は彼の人なれば、家を思ひ伯母を思はゞ、桂木とも思(おぼ)すな一郎とも思すな、彼の門(かど)すぎる共(とも)寄り給ふな。と畳みかけて仰(おほ)する時我が腸(はらわた)は断(た)ゆる斗(ばかり)に成りて、何の涙ぞ瞼(まぶた)に堪へがたく、袖につゝみて音(ね)に泣きしや幾時(いくとき)。

口惜しかりしなり其内心の、いかに世の人とり沙汰うるさく一村挙（こぞ）りて我れを捨つるとも、育て給ひし伯母君の眼に我が清濁は見ゆらんものを、汚（けが）れたりとや思す恨らめしの御詞、師の君とても昨日今日の交りならねば、正しき品行は御覧じ知る筈（はず）を、誰が讒言（さかしら）に動かされてか打捨て給ふ情なさよ、成らば此胸かきさばきても身の潔白の顕（あら）はしたやと哭きしが、其心の底何者の潜みけん、駒（こま）の狂ひに手綱の術（すべ）も知らざりしなり。

小簾（をす）のすきかげ隔てといへば、一重ばかりも疾（や）ましきを、此処十町の間に人目の関きびしく成れば、頃

は木がらしの風に付けても、散りかふ紅葉のさま浦山しく、行くは何処(どこ)までと遠く詠(なが)むれば、見ゆる森かげ我を招くかも、彼の村外れは師の君のと、住居のさま面かげに浮かんで、夕暮ひゞく法正寺の鐘の音かなしく、さしも心は空に通へど流石(さすが)に戒しめ重ければ、足(あし)は其方に向けも得せず、せめては師の君訪ひ来ませと待てど、立つ名は此処にのみならで、憚りあればにや音信(おとづれ)もなく、と絶(だ)えし中に千秋を重ねて、万代(よろづよ)いわふ新玉(あらたま)の、歳たちかへって七日の日来(きた)りき、伯母君は隣村の親族がり年始の礼にと趣き給ひしが、朝より曇り勝の空いや暗らく成るまゝに、吹く風絶へ

たれど寒さ骨にしみて、引入るばかり物心ぼそく不図(ふと)ながむる空に白き物ちら〳〵、扨(さて)こそ雪に成りぬるなれ、伯母様さぞや寒からんと炬燵(こたつ)のもとに思ひやれば、いとど降る雪用捨(ようしや)なく綿をなげて、時の間に隠くれけり庭も籬(まがき)も、我が肘(ひぢ)かけ窓ほそく開らけば一目に見ゆる裏の耕地の、田もかくれぬ畑もかくれぬ、日毎に眺むる彼の森も空と同一(ひとつ)の色に成りぬ、あゝ師の君はと是れや抑々(そもそも)まよひなりけり。

　禍(わざはひ)の神といふ者もしあらば、正(まさ)しく我身さそはれしなり、此時の心何を思ひけん、善(よし)とも知らず悪(あ)しとも知らず、唯懐かしの念に迫まられて身は

前後無差別に、免（の）がれ出（いで）しなり薄井の家を。
是れや名残と思はねば馴れし軒ばを見も返へらず、心いそぎて庭口を出（いで）しに、嬢様この雪ふりに何処（いづこ）へとて、お傘をも持たずにかと驚ろかせしは、作男の平助とて老実（まめやか）に愚かなる男なりし、伯母様のお迎ひにと偽れば、否や今宵はお泊りなるべし、是非お迎ひにとならば老僕（おやぢ）が参らん、先（まづ）待給へと止めらるゝ憎くさ、真実（まこと）は此雪に宜（よ）くこそと賞められたく、是非に我が身行きたければ、其方は知らぬ顔にて居よかしと言ふに、取（とり）しめなく高笑ひして、お子達は扨らちも無きもの、さらば傘を持給へとて、其身の持ちしを我れ

に渡しつ、転ろばぬ様に行き給へと言ひけり、由縁(ゆかり)あれば武蔵野の原こひしきならひ、此一ト言さへ思(おも)ひ出(いで)らるゝを、無情(つれなか)りしも我が為、厳しかりしも我が為、末宜(すゑよ)かれとて尽くし給ひしを、思ふも勿躰なきは伯母君のことなり。

斯(か)くまでに師は恋しかりしかど、夢さら此人を良人(つま)と呼びて、共に他郷の地を踏まんとは、かけても思ひ寄らざりしを、行方(ゆくかた)なしや迷ひ、窓の呉竹(くれたけ)ふる雪に心下(したを)折れて我れも人も、罪は誠の罪に成りぬ、我が故郷を離れしも我が伯母君を捨てたりしも、此雪の日の夢ぞかし。

今さらに我が夫を恨らみんも果敢（はか）なし、都は花の見る目うるはしきに、深山木（みやまぎ）の我れ立ち並らぶ方なく、草木の冬と一人しりて、袖の涙に昔しを問へば、何ごとも総（す）べて誤なりき、故郷の風の便りを聞けば、伯母君は我が上を歎げき歎げきて、其歳の秋かなしき数に入り給ひしとか、悔こそ物の終りなれ、今は浮世に何事も絶えぬ、つれなき人に操を守りて知られぬ節（ふし）を保（たも）たんのみ、思へば誠と式部が歌の、ふれば憂さのみ増さる世を、知らじな雪の今歳も又、我が破れ垣をつくろひて、見よとや誇る我れは昔しの恋しき物を

（完）

底本：「新日本古典文学大系　明治編　24　樋口一葉集」岩波書店
　　２００１（平成13）年10月15日第1刷発行
初出：「文学界　第三号」
１８９３（明治26）年３月31日
※括弧付きのルビは校注者が加えたものです。
入力：土屋隆
校正：noriko saito
２００７年８月９日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。